



朝露に包まれるバラ園は、
光と色彩のドラマだ。

その広大で壮麗なバラ園を目撃した人は、きっと大きな組織が運営しているにちがいないと思うことだろう。すべて個人の「道楽」で始め、続けられていると知ったら呆気にとられ、感動する。営業ではないから、見学は自由。花が好きでしたらぜひどうぞ、なのである。保育園の園児たちから高齢の方々まで、そして障害のある方々などさまざまな見学者が口コミで訪れる。だれもが、「おかげで元気をもらいました」と帰ってゆくが、「なんの、元気をもらったのはこっちのほうです」。

藤井勝美さんは穏やかに笑う。
農水省に長く勤務し、東京はもちろん、東北へ、北陸へ、九州へと全国に転勤し、退職後4年間、姫路で働いた。「すべてを勤め上げたらのんびり花でも作って暮らそう」とは、ずっと頭の片隅にあったことだ。それが実現したのは、最後の仕事先の姫路でみごとなバラ園に出会ったことが大きかった。「花の色に圧倒されました」。

実現まではもちろん試行錯誤が重ねられた。始めたら始めたで大変な作業の連続。真夏の消毒では気が遠くなりそうに…。「思いこんだら脇目もふらず突き進む人で、はらはらしてしまいます」という久野夫人の証言がある。たしかに、この規模の園を築くのはいいかげんな気持ちではとうてい無理だったとは容易に想像できる。

バラは美しさの底が深い。「とりわけ、朝露に包まれている姿は言葉に尽くせません」。その光と色彩のドラマが、すべての原動力だ。

バラ園 藤井勝美
藤井久野



ゆう
う
ゆう、
は
り
ま